

# André Roussin のコミックについて

— 初期作品《La Petite Hutte》をめぐって —

森 本 達 夫

## I

一九一一年・マルセイユに生まれた André Roussin は、現代のパリに於ける演劇活動を見る時、いわゆる Boulevard 劇の方面では見落すことのできない喜劇作家の一人である。一九五〇年の初頭に、彼の三つの作品 *Nina*,<sup>(1)</sup> *Bobosse*,<sup>(2)</sup> それに *La Petite Hutte*<sup>(3)</sup> でパリの三つの劇場が満員になり、一世を風靡したことが、René Lalou<sup>(4)</sup>によって報告されており、又、Georges Versini は、1970年に、戦後、Roussin が喜劇界での maître であることを認めていた。<sup>(5)</sup>《Théâtre de digestion》の愛好家の多くが、この作家の才能を称賛したのであり、Roussin の劇の与えるものが「その日かぎりの楽しみ」であるにしても、それなりの評判を保ってきたのである。

しかし、一方に於て、この作家の人気を支えているその Boulevard 劇的性格の故に、彼の作品の価値を疑問視する評家も少なくない。多少とも知的な観客が、Boulevard 劇という言葉を、良い意味で使うことは稀で、むしろその場合には、哲学的深さも、文学的価値もなく、一般受けのみをねらった低級な芝居として断罪されていると考えてよく、この作家も例にもれず、何の形而上学的苦悩もないと判断され、彼の劇に登場する人物たちは、その俗物ぶりをこきおろされている。<sup>(6)</sup>

この様に、彼の作品については評価の基準に従って、好意的評価と否定的見解との二つに出会うが、双方共に、彼の劇が Boulevard 劇の genre に属するものであると見なすところでは一致しており、現在この用語の曖昧性は認められながらも、一般的に、食後の腹ごなしに見る気楽な娯楽としての芝居といった通念があり、Roussin の劇も「とにかく笑わせる」という段階では、全ての層の観客を満足させるものをもってはいるのである。実際、彼が舞台にのせるテーマは、彼自身 *Ni de la guerre, ni de folle politique, tout cela me dépasse et n'est pas théâtral. Ma pièce est sur le plan strictement conjugal*, と *Les glorieuses* <sup>(7)</sup> の中で一人の劇作家に述べさせているように、この種の劇に伝統的な家庭生活や、「古典的な三角関係」であり、登場人物及び舞台でくりひろげられる場は、アクチュアルであることは認めつつも、テーマ自体には何ら新奇なものを打ちだそうという意図は見い出されないのは事実である。

しかしながら、この作家が果して、一般的にみなされているように、ただに「陽気な作家」であるだろうかと、Jean-Paul Lacroix は彼の *Le Livre blanc de l'humour noir* の中で自問し、Roussin の劇の中で起る事柄を列挙して再検討している。<sup>(8)</sup>

Un garçon naïf et tendre est exploité par son ami, trompé par son amie, (*Bobosse*), Un mari accepte, sur une île déserte, de partager sa compagne avec son meilleur ami, et y prend plaisir, (*La Petite Hutte*), etc.

そして、この本の著者は、Michel Aubrinat の次の言葉を引用している。<sup>(9)</sup>

Ses pièces en apparences joyeuses et libres sont une assez triste galerie de cocus, d'assassins en puissance, de femmes frivoles et cruelles, un

joli monde.

実際、彼の作品を眺めてみる時、それらは多くの場合、夫婦生活や、三角関係といった風俗的で平凡な枠内で終始してはいるが、その枠の中で起る事柄それ自体は、しばしば残酷であり、少なくとも屈託のないコミックとは縁遠いものであることを認めざるを得ないようである。しかしながら、既に述べたように、彼の劇を見終った観客は、Je serais incapable de vous dire aujourd'hui ce qui se passe dans votre pièce! Mais je sais que j'ai bien ri.<sup>(10)</sup> と口をそろえる。彼の作品が提供している陽気なコミックのその条件を成すところのものに今一度検討を加えてみることは可能であろう。

一つの劇がコミックとして成立する条件は、実際の劇場での俳優の演技や観客なども含めた様々な方面に探し求められなければならないであろうが、この小論では前述の一見非喜劇的なテーマや諸事件が、いかに一個のコミックに仕立てられているかを、大成功を収めた彼の初期の作品 *La Petite Hutte* の分析を通して解明する。そうすることにより我々は André Roussin の独自の喜劇性的一端を明らかにしたい。

## II

*La Petite Hutte* の初演は一九四七年。彼のはじめての成功作である。この作品は、作者自身をも驚かせるほどの成功を収め、一時期作者に次の作品を書くことをためらわせたほどのものであり、彼のその後の作品のトーンを決定するほどの影響を残しているといつてよいであろう。先ずこの劇に登場する人物や事件をあらすじと共にたどってみよう。ただし、この劇の真の本質を成すものは人物がそれぞれの状況に於いて示す réaction にある。

Philippe とその妻 Suzanne, それに Philippe の親友であり, 同時に Suzanne の隠れた恋人でもある Henri, この三人の人物が航海中に難破して南の孤島に漂着し, そこで生活を始める。今は Philippe が常に身近にいたので Henri は, Suzanne とバリーにいた時のようには振舞えず, 困った彼はついに Philippe に彼の妻との仲を打ちあけて彼を説きふせ, Suzanne を共有することになる。数日後, 彼等の前にこの島の王の息子と覚しき一人の黒人が突然現れ, Philippe と Henri を縛りあげ, Suzanne を奪ってしまう。この黒人を島の王子と信じていた Suzanne は, 翌日この男も同じくこの島に流れついた船の給仕に過ぎないことを知る。自尊心を傷つけられた彼女は, 二人の男を駆りたてて黒人を縛りあげ, 以後, 料理人としてこき使うことにする。Henri は Suzanne の真の夫 Philippe に, Suzanne と手を切ることを約束する。ところがその時, 船の汽笛が聞こえてバリーに全員帰れることが分かると, Henri は Suzanne に, また以前と同じように, バリーで幸福に関係が続けられるだろうと耳うちし, 全員陽気に舞台を退いて幕となる。夫 Philippe も以前と同じく, バリーで cocu であり続けるであろう。

以上は, 南の島を舞台にした異様な三角関係といってよいだろう。前述の如く, 出来事それ自体は, 荒唐無稽で, ややもすればグロテスクに傾きもする。面白味は恐らく風変りな艶笑談のそれであろうが, Roussin はこの劇がいわゆる vaudeville の常套法に発していることを認めつつ, 更に, この作品の創作意図を次の様に述べている。<sup>(4)</sup>

En partant d'une situation de vaudeville, j'ai tenté d'écrire une comédie. Celle-ci pourrait s'intituler 《La comédie des réactions》, étant entendu que l'honnêteté de chaque personnage est absolue.

即ち, Roussin は三角関係にある男女に, 南の孤島という特殊な場を与え,

様々な事柄や問題に向かわせ、それらにあくまでも絶対的な誠実さをもって反応させてゆくというのであろう。既に見てきたように、この劇の中で行われる事柄は、「誠実な」人物とは相容れないもののようである。このお互いに相矛盾するような二つの要素が、いかに劇の中で一つに織りこまれ、コミックとして成立してゆくかを見ることが、以下の分析の課題である。

### 第一幕

舞台は、熱帯植物に囲まれた南の島の一画である。Henri が隅に座って物思いにふけっていると、‘Ri....! Ri....!’ という女の声ひびき、Suzanne が入ってくる。ついで、この ‘Ri’ という音をめぐって、二人の議論が始まる。Suzanne の発音する ‘Ri’ が ‘Henri’ と、フランス語で女が親しい男を呼ぶ際の呼称の一つである chéri の両方に聞きとれることが原因である。Henri は、自分が呼ばれたものと思って振りむくのだが、一方、この同じ ‘Ri’ を自分の妻が Henri を ‘chéri’ と呼んだものと思って、Philippe が、げげんな顔をしたことが以前にも何度かあったのである。ついに今、Philippe も、自分の妻と、親友との間の親密な関係に気づく (ouvrir les yeux) のではないかと、Henri が懸念し始めたのである。

このように、Roussin は、一種の言葉遊びで第一幕を始めている。‘Ri’ という音を舞台に与え、それが、同じ語尾の二つの言葉 ‘Henri’ とも ‘chéri’ ともとれることが、偶然、Henri という名前である 恋人を心配させることになる。その音をめぐって、両人が真面目な議論をしている間に、観客の方には Henri と Suzanne、それに Suzanne の夫 Philippe が三角関係にあることが判明してゆくという仕組みになっている。

Henri のその様な懸念に対し、Suzanne は、自分の夫が homme à ouvrir les yeux ではないことを保証するが、自分の夫が Henri に particulièrement

aveugle といわれて黙ってはいず、良き妻として、それを夫の論理的精神に帰して弁護する。

L'idée que toi - son meilleur ami - et moi - sa femme - puissions le tromper est une idée qu'il refuserait d'admettre au moment même où on lui prouverait qu'elle est vraie. Parce qu'à son point de vue, il y aurait là une malhonnêteté de notre part, et que sa femme ne serait pas sa femme et son ami ne serait pas son ami si l'un et l'autre étaient capables de malhonnêteté. Tu ne sortiras pas de ce raisonnement impeccable. (...) On ne peut jamais le prendre en défaut sur le plan de la logique.<sup>(29)</sup>

自分と Henri が Philippe をだましているとなると、自分たち二人は不誠実なものであることになるのであり、「妻」、「親友」という Philippe に対して誠実な存在としての自分、Henri と矛盾する故に、たとえそれが事実であると証明されても、論理的精神の持主である Philippe は、認める事を拒否するだろうと Suzanne は語るのである。Suzanne の話す Philippe のこの「論理的精神」は、Bergson が *Le Rire* の中で、コミックの対象として批判する現実よりも論理を重んじる哲学者<sup>(30)</sup>を想起させるものがあるが、更にここでは、上掲のように語る Suzanne は、「妻」、「親友」という観念は、不誠実さとは相いれないと主張しているわけであり、事実とはもあれ、彼女は考え方のレベルでは、「堅固な道德観をもった女」になりおおせているわけである。

Suzanne の、この道德にのっとった論に勝てない Henri は、話題を変えて、三週間前に難破してからの、この島での生活という現在の境遇を嘆き始めるが、Suzanne は、現在の境遇の中に Henri とは異ったものを見ており、彼女にいわせると、生き残ったのは三人だけで、それが自分たちだったのであり、今の境遇こそ「神が存在する」証拠だと、彼女の飛躍した見解を述べる。「神が存

在する」という観念を持ちだされて、それを敢えて否定できない Henri は、それでも負けずに、Suzanne の信仰を盾にとって、論破しようと試みる。

Henri: Je suis de ton avis, seulement, je ne peux pas m'empêcher de penser aussi que Dieu — qui nous a si gentiment arrachés à la noyade — sait maintenant que nous sommes ici. (...) Alors, si un bateau envoyé par ses bons soins n'arrive pas un de ces quatre matins pour nous recueillir, je serai en droit de faire toutes réserves sur les sentiments ou sur les capacités de Dieu, — ou tout au moins sur son esprit de suite. On ne sauve pas les gens d'un naufrage pour les laisser ensuite crever sur une île, que veux-tu !

Suzanne: Mon chéri, ne commence pas à l'indisposer par des blasphèmes.

Henri: Qui ?

Suzanne : Dieu. Tu doutes de son esprit de suite.

Henri: Je lui demande d'être logique.

Suzanne: Eh bien ! il l'est. Sois tranquille. Dieu est la logique même, — comme Philippe<sup>(14)</sup>.

Henri は神に論理的であることを求めるが、これも神の忍耐力を疑う冒瀆の言葉であり、Suzanne の信仰から見れば認めることのできない考えなのである。

結局 Suzanne にとっては、現在の境遇は、Nous mangeons, nous dormons et nous sommes au soleil toute la journée avec une température presque idéale. C'est aussi une chance ! と彼女がいうような魅力的なもので、その魅力は、ヴェカンスの宣伝文句そのままのような言葉で表現される境遇である。一方、Henri にとっては、夜になって Suzanne が、夫の Philippe と共

に一方の小屋に引込んでからは、一人きりで、もう一方の小屋で犬小屋の犬のように寝なければならないという我慢できぬものである。

以上のように、「現在の境遇」について、Suzanne は是としての、Henri は否としての意見を出し、相手を説得しようと、各々より「論理的」であることの優劣を競っているのだが、実は、この二人が「現在の境遇」の中に見ているものは、それぞれ別のことで、決して同じものではないのである。そしてついに、Henri は Philippe に、彼の妻との六年越しの仲を打ち明け、この島に於ても彼女を共有することを申しでるが、それも Philippe の論理的精神、道義感、友情、そして誠実さに訴える反論の余地のない論理をもってである。

Henri : Et je lui prouve avec une logique irréfutable que depuis six ans, lui et moi, nous te partageons en quelque sorte, et que depuis six ans il n'en porte pas plus mal, je dirai même qu'il est parfaitement heureux. Logiquement, il n'y a donc aucune raison pour que nous ne continuions pas à être aussi heureux en te partageant ici, comme à Paris. J'ajouterai que, pour lui, ce partage sera beaucoup moins grave puisqu'il ne sera plus insultant. Je prouverai à Philippe que, jusqu'ici, il était un mari trompé et que—toutes choses égales d'ailleurs, comme on dit dans les théorèmes—il ne sera plus. Ce qui est la vérité et la logique même. Un mari qui sait n'est plus cocu.

Suzanne : Oh ! Henri !

Henri : Je m'excuse. Peux-tu me dire qu'il aura à opposer à ce raisonnement ?

(...)

Henri : J'estime que Philippe, en regardant les choses en face, ne peut pas ne pas comprendre que je lui propose, au fond, la seule



solution normale pour des gens—comment dire, aussi liés que nous —je dirai même la seule solution morale.

(...)

Henri: A la réflexion, je trouve indigne de notre amitié pour Philippe de lui cacher notre amour, de lui tenir au dehors de ce qui est notre vie. Je suis persuadé qu'il sera extrêmement sensible à ce sentiment — je dirai: à cette délicatesse.

(...)

Henri: Moi, je suis certain qu'il nous sera extrêmement reconnaissant de notre honnêteté.

(...)

Henri: A Paris, ailleurs, on trouverait ça fou! Mais ici nous sommes dans une situation exceptionnelle, c'est donc une solution exceptionnelle qu'il est normal d'envisager.<sup>(6)</sup>

実は六年来 Philippe と Henri は、パリで Suzanne を共有していたわけであるが、三人ともそれで十分幸福だったのであり、この島でそれを続けて、皆が幸福でありつづけられないという理由は皆目ないのである。なぜなら、situation は全く同じだし、どちらかといえば、「事実を知っている夫」はもはや cocu ではないし、事が堂々と明かるみに出ることは、常に好ましいことなのである。

Henri のこの論は、彼の都合のよいように仕組まれたものではあるが、それが、様々な観念をともなった、「論理」の体裁をとっているだけに Philippe は反対することができない。しかし彼は、妻の Suzanne に対しては、六年間、自分をだましてきた事を責めずにはおれないが、この批難も Suzanne に封じられてしまう。彼女は、Henri には黙っているけれども Philippe のためにつくした場合もあるというのである。例えば、一度ならず、Henri の誘いを断

って Philippe のそばを一晩中離れず、彼の横で小説を読んだりしたことがあるが、それこそ Suzanne によれば、恋人には分からない夫の平和な楽しみの一つなのだ。そういうことから見れば、Suzanne は、Philippe と Henri を同じようにだましてきたのであり、片方が自分はだまされたと不平を云う理由は全然ないわけだと、彼女は過去の特異な関係を平等という一般的観念に訴えて説明する。論理的な Philippe はついに、自分の妻を親友と共有することを承諾せざるを得なくなるのである。

今や Henri の提案も、観念の奇妙な応用にあって合理的なものになってしまい、「論理上」、何の問題も残っていないのであるが、彼等の間に、いくばくかの気まずさがあることは事実である。突然 Suzanne は、空に白い十字架を認め、男たちに願い事をさせるが、彼等の願いが、自分たちを救い出す船の到着だったのを聞いて、泣きだしてしまう。彼女自身は、Philippe と Henri が以前と同じように、いつまでも仲が良いように祈ったのであり、自分が皆の幸福のことを考えていた時に、男たちは、船のことなどを考えていたことに耐えられないのである。Philippe と Henri は、Suzanne のこの優しさに心を動かされずにはおれず、前後の事情を忘れて、彼女の涙ながらの頼みに、その前でお互いに握手をすることになってしまう。そして、いよいよ最終的な合意を全員で確認するのである。

しかしながら、Philippe が Henri と Suzanne のそばを離れようすると彼等は、自分たちがまたもや、予期しなかった事態にあるのに気づくのである。というのは、Philippe が妻と親友を残して釣に出るといって、二人は、わざわざ、夫の不在を予告されたようで落ち着かず、一方、夫の方も自分のいない間に二人の間に起るかも知れないことを考えずにはおれないからである。が、

Philippe が Suzanne を一週間おきに、交互に所有することを提案して合意を得、Suzanne は、彼を、真に論理的で組織力のある男であり、現在の話題の特殊性には目をふさぎ、事業で成功した理由も分かると賛美する。やっと安心した二人の男は、心おきなく釣りに出かけ、Suzanne は情のこもったまなざしで ‘mon chéri’ と思わずいってしまうが、現在の situation を正しく認識し、‘mes chéris’ といい直して彼等を見送り、一幕が終わる。

孤島での生活という境遇に投げこまれた人物たちは、以上のように、この新しい事態に適応するだけでなく、更に、踵の水腫にココアの実が効くことを発見したり、蝶の好きな Philippe は、Suzanne の下着を葦の先につけて、昆虫採集用の網にしたりして、それぞれ、そこで起る事柄、事物に積極的に反応してゆくのである。

Suzanne : Voilà l'avantage d'être échoués sur une île. On essaie tout ! On va de découverte en découverte ! Jamais à Paris tu n'aurais eu l'idée, à une terrasse de café, d'essayer l'effet d'un cocktail sur une ampoule à ton talon.

(...)

Philippe : Parfaitement. Ce n'est pas autrement qu'ont été trouvés<sup>(47)</sup> le thé, le café ... par accident !

彼等は、Bergson<sup>(48)</sup> 流に云えば、正に良識を用いて対象に応じて考えを変えながら、絶えず柔軟に適応し、又、適応してゆこうと精神的努力を払っているのである。

しかしながら、同時に Suzanne は立場としては Philippe の献身的な妻であり、又、Henri の魅力的な恋人であり、性格的には強い女でもあれば、感受

性も豊かで、信仰心に富んでおり、少々迷信家でもある。Henri は Philippe の親友であり、Philippe の妻 Suzanne の六年来の恋人でもあり、又、甘やかされた子供のような面をもっている。Philippe は愛妻家であり、又、友人の Henri を信頼してもいて、cocu でもあるが、Suzanne にその論理的精神を高く評価されている成功した実業家でもあり、この島では青酸カリが手に入らないので、採集した蝶を優しく殺せないのを残念がる男でもある。

それ故、彼等は、以上の様な様々な面と立場と態度をもって、前後の脈絡もなしに事に接し、又、対象は、彼等の一人一人に個有の反応を引き起こすことになる。しかし彼等は、この地にあってもあくまで論理的態度を失うまいと、すべてを論理の俎上において処理しようと、誠実な努力を払うわけである。彼等のこの不断の努力にあって、物事は彼等の熱中する論理の中では、attitude logique, Dieu, honnêteté といった観念に次々と照らされ、一様ならぬ姿で現れてくるのである。こうして一人の夫が、自分の妻をもう一人の男と共有するという、それ自体は不道德な事の運びではあるが、この劇の中ではその出来事自体のレベルと別にもう一つのレベル——その中で物事が登場人物によって論理に組みこまれるレベル——があって、その論理化の過程の中で、現実はその意味あいを新しく与えられ合理的なものになってしまい、人物たちは常に誠実で、非難の余地のない人間でありつづけるわけである。

## 第二幕

それでは次に、この劇の第二幕に移り、彼等のとりきめのその後の成り行きを見てみよう。この幕も第一幕と同じように “Ri” をめぐる一種の言葉遊びから始まっている。しかし Suzanne に、彼女の発音する ‘Ri’ が ‘Henri’ と ‘Chéri’ の両方に聞きとれるのに苦情をいうのは、今度は Philippe で、彼は ‘Henri’ を指す時の正しい呼び方を大声で何回もどなって模範を示す。その

声を聞きつけて、自分が呼ばれているものと思った Henri が、何かと駆けつけてくる。Philippe の 'Ri' に関する「聞き違い」を防ごうという努力が、また一つ別の「聞き違い」を起してしまうのである。Henri は事情を知って、腹をたてて立ち去る。

Henri が不気嫌なのも無理からぬ事で、新しく起って来た事態は Henri の提案から始まってなされたことではあるが、彼の思惑を大きく外れたところにあるのである。というのは、自分の妻 Suzanne に、Henri という恋人がいることを知ってから Philippe は、自分が夫であることを新たに意識し、今までの夫婦生活のマンネリズムから抜け出し、若がえったのである。Philippe は上機嫌に Henri に礼を述べ、*Savoir que sa femme tient aussi un autre homme, c'est un ressort prodigieux, par la concurrence.*<sup>(19)</sup> と、「競争」の功德として、この意外な結果を説明する。

Philippe: .... car les femmes n'aiment qu'une chose: sentir qu'on pense à elles tout le temps. — C'est la logique même! Et c'est tellement logique que je ne peux pas arriver à comprendre comment notre civilisation soi-disant évoluée en est encore à la formule du mari unique.<sup>(20)</sup>

一方 Henri は、Suzanne と一緒にいる時も、彼女の夫が知っているということが頭を離れず楽しい気分になれない。

そこで彼は、Philippe の「競争」の理屈を馬鹿げたものである事を証明しようと試みる。

Henri: Je pousse ton raisonnement à l'absurde puisqu'il ne s'agit que de raisonnement.<sup>(21)</sup>

そして今一度、今度は「兄弟姉妹のように生きる」という表現を使って、自分

と Philippe が一つの小屋に、Suzanne がもう一つの小屋に一人で寝起きするように提案する。そして Philippe の拒絶にあうと、彼を「苦んでいる親友が助けを求めている」のに、援助してくれないと非難する。

この一寸険悪な空気は、一人の黒人の突然の出現によって破られる。この黒人は一言も口をきかず、黙ったまま Suzanne に花環を捧げ、この鄭重さに、彼等はこの男を島の王の息子と判断し、ついで、Philippe と Henri は、彼がそばに立っていた杭と自分たちを交互に見くらべるのを見て、王の儀仗兵に入れるつもりで、身長を計っているものと思い、手助けしようとその杭に身をよせるが、たちまちにしてその黒人に杭に縛りつけられてしまう。

Suzanne は、この黒人の不意の仕打ちを見ても、王子に対して礼を失した白人男たちには良い教訓だと、彼等の甘い判断をからかうだけで、同時にその黒人の中に一層の品位を見てとる。黒人はそれから、Suzanne を小屋の前に連れてゆき、一緒に中へ入ろうと身振り以示す。今やその男の意図は明白だが、Suzanne は自分の善良さにかけても、彼の意志に逆うわけにはゆかない。なぜなら、ナイフを持っている黒人を実力で倒すことなど不可能だし、それに、危害を加えそうにない彼を殺すことは、「優しさ」に欠けることになるからである。他方、縛られた二人の仲間をそのままにして、自分だけ逃げるわけにもゆかず結局、二人の縄を解いてもらうためには、黒人の申し出を受けいれるほかないと、彼女は考えるのである。

Suzanne : Alors ? que faire ? Je ne vais tout de même pas vous  
laisser ficelés là jusqu'à demain ! Ce serait honteux de ma part.

以上のように、各々の人物は、自分たちの前に突然出現した物を云わない黒人に対し、すぐさま自分なりの判断を下して反応し、結局 Philippe と Henri

は杭に縛りつけられ、Suzanne を奪われてしまうが、Suzanne によれば、Henri と Philippe が縛られたのは、礼儀知らずの白人男たちへの良い教訓であり、又、自分が黒人と一緒に小屋の中へ入るのは、あくまでも、仲間の白人を救うための高潔な行為なのである。

### 第三幕

Philippe と Suzanne がテーブル代わりの箱の前に腰を下ろし、食事をしているが、Henri だけは彼等から離れて、黒人、即ち自分たちの敵の持ってきた魚など食べてけしからぬと、いきまいている。Suzanne は、黒人は敵ではないし、自分の行為についても、それは Philippe と Henri を解放するために払った適当な代価だと主張する。そんなところへ、黒人が果物を持って再び現れ、突然フランス語を喋り出し、自分は船の給仕をしていたが、難破してこの島へ流れついたのだと告げる。これを聞くや、Suzanne はこれまでの見方をすっかり変えると同時に、何もしようとはしない男たちに腹を立てる。

Suzanne : Comment: mais non ? Et qu'est-ce que je disais ? Ce qui était vrai pour un jeune roi sauvage, vivant sous une loi que nous ignorons, n'est plus vrai du tout pour un cuisinier à bord d'un paquebot ! Vous n'allez tout de même pas trouver qu'il est normal d'accepter ça de la part d'un civilisé ? Oh ! quel sauvage ! — Ah ! on a raison de dire que le cinéma éduque les masses ! Il leur donne des idées propres ! car jamais, justement, un véritable sauvage n'aurait agi de la sorte ! Jamais ! Il aurait eu bien trop peur d'être puni par son dieu ! Alors ? Vous ne le lynchez pas ? C'est ainsi que vous vous préparez à me venger de la violence dont j'ai été victime ? (...)

Partez à sa poursuite ! Cernez-le !

自分は暴行を受けたのであり、その男を追跡して包囲し、捉えてリンチにするべきだと、尻込みする二人の男をけしかけるのである。そして、黒人があの様な暴挙に出たのも、映画の影響だと注釈をつけるが、このシーンでは、Suzanne も映画の感化を受けており、このヒステリックな彼女の言葉も、以前にこの黒人を島の王子と判断したのと同じく、彼女が映画から既に得ていたイメージが、一つのきっかけで、反射的に、出てきただけのことなのである。このように、彼女の意識は、現実をきっかけにして、その極端なイメージにすぐに移向するのである。Philippe は、包囲するためには二人だけでは足りないし、相手はナイフを持っていると、彼女を現実にもどそうと努めるし、Henri は、そこまでするのはグロテスクであるとの意見を述べる。

しかし、一計を思いついた Suzanne は、二人に黒人を油断させるために、寝たふりをしているようにいい残して、黒人を探しに行ってしまう。残された二人は寝た振りをするには、いびきをかいた方がよくはないかと議論を始め、そのうちに、Suzanne に連れてこられた黒人に、もう一度、手足を縛られてしまう。しかし、今度は Suzanne が黒人からナイフを取りあげ、二人の縄をほどかせてから、彼を杭のそばにつれてゆき、注意をそらせようと、空の一点を指びさす。しかし、Philippe と Henri は、Suzanne が空に何かの印を見る癖のあるのを覚えているので、又かと、一緒になって空を見上げ、Suzanne に歯がゆい思いをさせる。ついに二人は、彼女の意図を理解し、空を眺めている黒人を杭に縛りつけるのに成功する。

ついで彼等は、以後おとなしくして、料理人として仕えるならばと、黒人を自由にしてやるが、この黒人の名前も、偶然 Philippe であり、又もや「聞き違い」が起って、同名の Suzanne の夫の優越的態度を台無しにするようなことになる。



Philippe : Il faudra prendre l'habitude de répondre : Oui, Madame, n'est-ce pas ? Comment vous appelez-vous ? Vous ? Vous avez un nom ?

Le Noir : Oui, Philippe.

Philippe : Comment ? Je vous demande de répondre : Oui, Madame, ce n'est pas pour que vous me répondiez à moi : Oui, Philippe.

Le Noir : Pourquoi ?

Philippe : Vous vous f . . . de moi ?

(...)

Philippe : Est-ce que je vous ai autorisé à m'appeler par mon nom ?

Le Noir : Je ne comprends pas.

Philippe : Je vous demande le vôtre.

Le Noir : Oui, Philippe.<sup>(24)</sup>

Suzanne は黒人と二人きりになって、これからの注意事項を与えると、彼は恭々しく膝まづいて手に接吻するので、思わず又、'Oh! prince!' と、夢見心地になって反応してしまい、あわてて気を取り直す。

一方, Henri は Philippe に, 自分たちの友情が続くように, Une amitié entre deux hommes ne peut pas durer si une femme se trouve là.<sup>(25)</sup> という諺をひき, それが一般的に妥当なものであるとして, Suzanne と手を切るとを約束すると, Philippe は何故自分が Suzanne を Henri と共有することを認めたかを Henri に打ちあける。愛妻家の彼は, Suzanne が溺死を免れて元気に自分のそばを生きて歩いているというだけで, 十分幸福だったのである。Suzanne に対する Philippe のこの深い愛情に Henri が感動していると, 船の汽笛が聞こえてき, Philippe は助けを求める信号を出しに行く。その間に, Henri は Suzanne に, Philippe は自分たちの関係はもうなくなったと思っているし, はからずも, 以前の三人の関係に戻るわけであり, パリで前と同じよ

うに、全員幸福に暮らしてゆけるだろうと話す。彼等はまだ一人の Philippe (黒人) を従えて、船の汽笛の鳴りひびく中を、各々自分なりの思惑をもって満足しながら全員陽気に舞台を退場してゆく。

南の島で生活を始めた三人は、様々な困難に出会いつつも、常に「誠実な人物」として自分たちを守り通した姿となるわけである。ところで、彼等は同じ場にありながら、各々違った形で物を見、反応して、いわば、現実の中に彼等がみてとるものの内部に狭く閉じこめられているのではあるが、同時に種々の観念を応用して、それらを普遍的な道理として正当化してゆくのである。云ってみれば、彼等は全員、自らの思考の幸福な「とりこ」である。そしてそれ自体は突飛で、時にはグロテスクとなる事件の成り行きも、彼等の論理の中では無害で、むしろ道理にかなったものとなり、それを生きる人物たちも、その誠実さに関する限りは非難されないものとなるのである。

Bergson は彼の *Le Rire* の中で、喜劇的人物と、喜劇的集団に特有の論理を *l'inversion toute spéciale du sens commun* と名づけ、次のように述べている。

Elle consiste à prétendre modeler les choses sur une idée qu'on a, et non pas idées sur les choses. Elle consiste à voir devant soi ce à quoi l'on pense, ... Le passage se ferait d'ailleurs insensiblement de ce qui ne veut rien entendre à celui qui ne voit plus que ce qu'il veut.

Roussin の劇の人物たちも、この *l'inversion toute spéciale du sens commun* の拡大の中にあり、その一つの変形として見る事が可能であろう。彼等は、同じく Bergson のいう良識一対象に応じて考えを変えながら、絶えず

適応し、又、再適応してゆこうとする精神的努力—をはたらかせ、自分たちにかかわってくる事柄に対して、その場に応じて反応すべく努力をしてはいる。だが、それらの反応は、実は、登場人物の一人一人を特徴づけているところの夫、妻、親友、恋人といった立場や、Henri, Philippe, Chéri などの名前、呼称、それに態度や信仰、更に多分に映画などによって与えられた既成のイメージなどによって決定されている。それらの要素はその間に何の統一も一貫性もなしに、ただ雑然として、一つ一つ、いわば Bergson のいう「こわばり」として、表出されてゆくのである。彼等は、自分たちのかたよった反応に、広く受け入れられた観念や価値をあてはめて、論理的に正当なものとし、現実を、自分の欲する様相に変えてしまうのである。

しかし、彼等の現実への反応が、l'inversion toute spéciale du sens commun であり、観客の目に喜劇的なものとして映るいわゆる「放心」であるとしても、その原因をすべて、この種のジャンルの劇の常套法である、登場人物の事実を知らされていないところから起る「取り違い」quiproquo に帰するわけにはゆかない。

「取り違い」劇に於ても、登場人物たちは、各々自分にかかわってくる一連の事件の中で、それらに対して判断を下し、反応してゆくのではあるが、それらの反応が喜劇的なのは、彼等が自分のいる situation について、しばしば部分的な、もしくは誤った知識を自分の持分として、作者によって振り当てられているからである。たとえば、quiproquo 劇の代表的作品の一つ Georges Feydeau 作の *La Dame de chez Maxim*<sup>(4)</sup> では、Petypon が酒に酔って、踊り子の Crevette を自分の家に連れて帰り、翌日、訪問しにきた叔父の将軍に、彼女を自分の妻として、嘘をついて紹介する破目になる。将軍は、Petypon の言葉を信じ、二人を夫婦だと思いこんで自分の姪の結婚式へ招待し、それ以

後、その無知を基盤にして、発言し、行動してゆくことになる。

一方、観客の方には、そういった situation の真の意味と、その様々な面が知らされており、将軍等の登場人物たちの認識の段階、現実に対する「放心」の度合いと、Crevette が一介の踊り子に過ぎないという現実との距離を計ることができるのである。そして、パーティーの席上で田舎の上流婦人たちは、Crevette の奇妙な物腰、態度を、パリの上流階級の流行と 思いこんで真似をするようになり、その真相を知らぬまま、皆が進むのである。

しかし、劇も終幕近くになって、将軍は、Crevette の素姓、事実を知らされると、たちまち目をさまし、その「取り違い」から解かれるべく、正しい認識が附与されているのである。やがて、全員が、Crevette と Petypon は夫婦ではないという事実の同一平面で出会うことになるのである。それ故、そういった situation に於ては、登場人物たちの様々な「放心」にもかかわらず、それと平行して、常に事実としての確かさをもった、唯一の現実があり、登場人物たちも、真相を知らされると、「放心」からさめることが保証されているのである。

しかし、Roussin の劇に於ては、そういった意味での確かな現実も、登場人物の信頼に足る認識も、もはや見つけることはできない。そこでは、既に見てきたように、人物の内部にある様々のできあいの観念の塊りが、事実の認識そのものをゆがめ、彼等を現実から放心させる原因になっているのである。そこでコミックの対象になっているのは、事実の認識の仕方そのものである。第三幕になって、三人が、黒人が船の給仕であるという真相を知ってしまった段階に於ても、彼が膝まづいて、Suzanne の手に恭々しく接吻すると、彼女はその品位に打たれて、「Oh ! . . . prince ! . . .」と、再度、夢見心地で反応してしまうのである。

この劇の中では、現実も、登場人物の各々がもつ、論理化への欲求にふりまわされて、いろいろに、その様相を変えるのであり、事実としての一義性を失っているのである。それは、彼等の一人一人に、それぞれ、異った面を、一時的に示すと同時に、一方に於いて、常に、彼等の思惑をすりぬけてゆく、捉えがたいものとなっているのである。Roussin は、彼の劇の一つの中で、Raisonnons. . . . Car ça change tout と人物の一人に語らせているが、この *La Petite Hutte* に於ては、この raisonnement を極端に押し進め、拡大したところに、この劇のコミックの生まれる条件があるといえよう。

### III

批評家の一人は、Roussin の劇を théâtre-miroir と呼び、以下のように述べている。

Le théâtre où le spectateur peut se reconnaître, et reconnaître ses travers, ses tics, ses goûts et ses dégoûts, et ses passions.

実際 *La Petite Hutte* は、南の孤島という非日常的な場(しかし、同時に、これはエキゾチックな夢として、観客の中に一般的に定着しているのも事実であろう)を舞台にしながらも、そこでの事実、出くわす事柄は、登場人物の中にある、観客が日常生活の中で、共通に経験し、よく知られていて、時にはあまりにありふれていて変りばえのしない観念や価値、態度、モラル、信仰、好み、又イメージを引き起すためにのみあるのである。いわば、風俗的な日常生活を浮きぼりにするために、この非日常的な場がとられているのであり、そこに、一種のくすぐりの面白味がねらわれているのだが、それらの手法は又、否定的にも見られて、彼の劇の中に登場する人物が、平均的なモラル、俗っぽい

枠から出ていないとの評を受けるゆえんでもある。確かに、セリフを一つ一つ取り出して、その中に現れているもの、それ自体を見れば、深みも新鮮さも認められず、気楽な芝居を期待して見にくる観客の不意をつくようなことは決してないような、一般に受け入れられた「出きあいの観念」の陳列であることは間違いないようである。しかし、既に述べて来たように、その出きあいの、従ってそれ自体の正当さは十二分に保証されたものが、彼の劇の中では l'inversion toute spéciale du sens commun の形で現れるように situation が組まれており、それを語る人物をコミックな存在におとしいてしまうところの、何か滑稽なものに、突如として化してしまうのに注目すべきであろう。Roussin の劇が、同時代の théâtre-miroir であるとしても、それは、ゆがんだ像を提供し、喜劇的な存在にして映しだす一種のマジック・ミラーなのである。

そのような situation 全体の中では、登場人物たちの誠実さを支えてきた観念は、結局自ら失墜せざるをえず、その本来の価値を失うしかないのである。

この *La Petite Hutte* は、一定の時間の中で、開幕から終幕へと直線的に筋が進開してゆく構造をもっているにもかかわらず、内容的には、三人の関係が以前通りにいた時と同じ関係になって、元の通りの situation になるところで幕が下り、一種の回帰的構造になっているのである。その途中の過程の騒々しさは後には何も残さず、いわば、Shakespeare 風に云えば、「夢と同じ材料でできている」<sup>(81)</sup> のである。しかも、終幕の彼等の幸福と満足は、Philippe が Suzanne と Henri の仲を知らされないという条件、即ち、全員が現実の同一平面に足を下さないことに依っており、今後どうなるかわからぬままである。

P. Surer は、Roussin の劇に登場する人物を、次のように結論づけている。<sup>(82)</sup>

Enfin et surtout, les personnages de Roussin ne sont pas nés d'une observation attentive de la vie quotidienne: ce ne sont que d'aimables fantoches, qui s'évanouissent dès qu'ils ont franchi les portants de la scène.

事実、彼等は、むしろ悲劇的な一連の事件を安価な観念と突飛な論理に満足して、深く悩みも、考えもせずに乗っかってしまう、単純で善良な人物たちであり、その中身は、むしろマリオネットのそれであろう。しかし、この単純な人形劇の材料のようなものでできた、この気楽な well-made play の軽快な進行の中で積み重なってゆくのは、以上述べてきた「論理」の中で現われてくる、それとは逆説的な、論理の愚かしさ、関節のはずれた人間と、空おそろしい現実の欠落である。

そして、Roussin の後年の作品が、Comique ではなくなり、悲劇的な色彩の濃い、深刻な重苦しいドラマであるとの評をうけた時、彼は、こう話している。<sup>(83)</sup>

Pourquoi <le drame> était-il plus perceptible dans cette pièce que dans *Nina*, ou *L'Amour fou*, ou *Les Œufs de l'autruche*? Pour moi pas plus triste que les autres, — ni moins... Non, j'avais écrit volontairement une Tragi-Comédie.

そして、アメリカの一批評家<sup>(84)</sup>は、彼の言葉に答えるかのように、Roussin は常に、喜劇を悲劇に変換してゆき、この二つの言葉が明確な定義の境界を失った事実の一例であると述べている。

そして更に、Roussin 自身以下のように述べている。

La vie est faite de ce mélange constant des personnages comiques et des événements tragiques.<sup>(85)</sup>

実際、この *La Petite Hutte* に於ても、筋立てを展開してゆく motif になっているものは、一人の女を二人の男が取り巻く（それに更に、もう一人の男が加わる）という状況、つまり、それ自体は、動かすことのできない事実であり、腕力（非論理）による現実的な解決法しか、予想させないものである。しかし、そういった関係を生きながら、常に現実のもつ陰悪さを避けて論理的であることの優劣を競いながら解決してゆこうとする、誠実ではあるが、同時に、コミックな人物を Roussin は創っているのである。しかし、この劇の中で人物達が、彼等の善良さを負っている条件を裏から見ると、それはそのまま、虚妄の論理と価値の上に築かれたイリュージョンの中に住んでいて、決してリアリティーに出会うことのない一種の現代の都会人の悲しい戯画になるわけである。この島での実際の生活と経験は結局、彼等の論理の材料になるのみであり、その「論理」も、その後で論理の前では、ただ愚かしいものになりはてる。

Roussin は、この作品で 50年代に、演劇史上空前のロングランを記録し、一躍、喜劇界の第一人者になったが、同時にそれは、彼に対して、Boulevard 劇という、小ジャンルの作家との見方を与えることにもなった。そして、後年になって、はじめて彼は、vaudeville を離れたドラマに傾いていったと見なされている。しかしながら、そのアクチュアリティは認められながらも、快い vaudeville の粋を出ることはないとされている、この *La Petite Hutte* に於ても、その根底にあるものは、この小論で見えてきたように、人間の存在がその中に閉じこめられている悲劇的な条件そのものである。これは、その後の作品にも、姿を変えつつ、一貫して流れてゆくものであるが、この作品では、それを Roussin は、同時に、卓越した才能と、高度の技術を駆使して喜劇に仕立てあげ、笑いの対象として、当時のパリ人に提供したと見るべきであろう。



## 註

- (1) 1949年初演で、《Comédies d'Amour》の中に収められている。（《Comédies d'Amour》，Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1959. Coll. Ouvrage de Théâtre.）
- (2) 1950年初演で、《Comédies de la scène et de la ville》の中に収められている。（《Comédies de la scène et de la ville》，Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1962. Coll. Ouvrage de Théâtre.）
- (3) 1947年初演で、《Comédies de Fantaisie》の中に収められている。（《Comédies de Fantaisie》，Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1960. Coll. Ouvrage de Théâtre.）
- (4) René Lalou : *Le Théâtre en France depuis 1900*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1970. p. 120.
- (5) Georges Versini : *Le Théâtre français depuis 1900*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1970. p. 113.
- (6) Paul Surer : *Le Théâtre français contemporain*, Paris, Ed. Société d'Édition et d'Enseignement Supérieur, 1964. p. 335.

Un autre public, et plus encore une certaine critique, entichés de haute intellectualité, criblent de leurs sarcasmes ces faibles cerveaux, que n'habite aucune angoisse métaphysique.

- (7) 1960年初演。《Comédies Conjugales》，Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1961. Coll. Ouvrage de Théâtre. p. 9.

又、エッセイ集の中でも、Ronssin は、このテーマが安易であるとの評に対し、次のように答えている。

Nul ne se demande jamais pourquoi, dans le théâtre de Molière, les personnages sont chez eux, ni à quelle heure se passent les événements auxquels l'auteur nous fait assister. Parce que ces personnages appartiennent à une société oisive. Personne ne s'est jamais demandé non plus comment Alceste gagne la vie, ni Philinthe, ni les marquis.

(*Contentement Raisonnable*, Paris, Ed. Grasset, 1965. p. 59.)

La société plus évoluée où Feydeau prend ses héros juit aussi d'une liberté comparable à celle des seigneurs du XX<sup>e</sup>, ceux qui portent jaquette l'après-midi à cinq heures et soupent en frac chez Maxim's.

(ibid., 60.)

Une comédie est toujours plus ou moins affaire de famille et d'amour extra-conjugal.

(ibid., p. 59.)

- (8) Jean-Paul Lacroix et Michel Chrestien : *Le Livre blanc de l'Humour noir*, Paris, Ed. de la Pensée Moderne, 1966. p. 452.
- (9) ibid., p. 452.
- (10) André Roussin : *Contentement Raisonnable*, p. 16.
- (11) *Sonorama-Théâtre, supplément théâtral au n° 25 de Sonorama*, Paris, p. 1960.
- (12) *La Petite Hutte*, (Comédies de Fantaisie, p. 140.)
- (13) Bergson は、自然の法則にとってかわる人為的な規則というものを紹介し、現実よりも、むしろ、論理を先行させる哲学者を例にあげて批判している。

Un philosophe contemporain, argumentateur à outrance, auquel on représentait que ses raisonnements irréprochablement déduits avaient l'expérience contre eux, mit fin à la discussion par cette simple parole :  
《l'expérience a tort》. (*Le Rire*, pp.36-37.)

- (14) *Comédies de Fantaisie* p. 142.
- (15) ibid., p. 146.
- (16) ibid., p. 152.
- (17) ibid., p. 158.
- (18) Henri Bergson は、「良識」を次のように定義している。

Le bon sens est l'effort d'esprit qui s'adapte et se réadapte sans cesse, changeant d'idée quand il change d'objet. C'est une mobilité de l'intelligence qui se règle exactement sur la mobilité des choses. C'est la continuité mouvante de notre attention à la vie.

(*Le Rire*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1950. p. 140.)

- (19) *Comédies de Fantaisie* p. 212.
- (20) ibid., p. 212.
- (21) ibid., p. 217.
- (22) ibid., p. 231.
- (23) ibid., p. 240.
- (24) ibid., p. 249.
- (25) ibid., p. 258.
- (26) Henri Bergson : op. cit., pp. 141-142.
- (27) Georges Feydeau は、いわゆる Belle Epoque の vaudeville の代表的作家で、*La Dame de chez Maxim* は1899年初演。

- (28) *Comédies de Fantaisie*, p. 251.
- (29) *L'Ecole des Dupes, Comédies Conjugales*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1961. p. 269.
- Reste Calme. Raisonçons. C'est le meilleur moyen de retrouver toute ta lucidité et peut-être celui de ne pas souffrir. Car, ça change tout !
- (30) Antoine Adam, Georges Lerminier, Edouard Morot-sir: *Littérature française*, tome second, Paris, Ed. Larousse, 1967. p. 348.
- (31) William Shakespeare: *The Tempest*, Acte IV, scène 1. 156.  
 ... We are such stuff  
 As dreams are made on; ...  
 (William Shakespeare: *The Complete Works*, edited with an introduction and glossary by Peter Alexander, Collins, 1968. p. 21)
- (32) Paul Surer: op. cit., p. 337.
- (33) *Contentement Raisonnable*: p. 149.  
*Un amour qui ne finit pas* (1963年2月初演) では, Roussin は「ドラマ」に転向し, 又, *La Voyante* (同年11月初演) は, メロドラマであるとの評を受けた。
- (34) Wallace Fowlie: *A Guide to Contemporary French Literature*, New York, Ed. Meridian Books, 1960. p. 189.  
 Roussin is constantly converting the comic into the tragic, and his theater is a example of the fact that the terms comic and tragic have lost any well-defined meaning.
- (35) *Contentement Raisonnable* p. 150.

## 参 考 書 目

- Antoine Adam, Georges Lerminier, Edouard Morot-sir: *Littérature française*, tome second, Paris, Ed. Larousse, 1967.
- Marc Beigbeder: *Le Théâtre en France depuis la Libération*, Paris, Ed. Bordas, 1959.
- Henri Bergson: *Le Rire, essai sur la signification du comique*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1950.
- Georges Feydeau: *La Dame de chez Maxim*, Paris, Ed. Livre de Poche,

1948.

Wallace Fowlie : *A Guide to Contemporary French Literature*, New York, Ed. Merdian Books, 1957.

Jean-Jacque Gautier : *Théâtre d'aujourd'hui*, Paris. Ed. Julliard, 1972.

Jean-Paul Lacroix et Michel Chrestien : *Le Livre blanc de l'Humour noir*, Paris, Ed. de la Pensée Moderne, 1966.

René Lalou : *Le Théâtre en France depuis 1900*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1951.

Paul Surer : *Le Théâtre français contemporain*, Paris, Ed. Société d'Édition d'enseignement Supérieur, 1964.

Georges Versini : *Le Théâtre français depuis 1900*, Paris, Ed. Presse Universitaire de France, 1970.

*Sonorama-Théâtre, supplément théâtral au n° 25 de sonorama*, Paris, 1960.

## 主 要 作 品

1. André Roussin : *Comédies d'Amour*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1959, Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
2. — : *Comédies de Fantaisie*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1960. Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
3. — : *Comédies de Famille*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1960. Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
4. — : *Comédies Conjugales*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1961. Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
5. — : *Comédies de la Scène et de la Ville*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1962. Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
6. — : *Comédies Dramatiques*, Paris, Ed. Calmann-Lévy, 1964. Coll. «Ouvrage de Théâtre.»
7. — : *La Mamma*, Monaco, Ed. du Rocher, 1957.
8. — : *Un Contentement Raisonnable . . . suivi de lettre sur le Théâtre d'aujourd'hui*, Paris, Ed. Grasset, 1965. Coll. *Moi et mes Personnages*.
9. — : *La Boîte à Couleurs*, Paris, Ed. Albin Michel, 1974.